

# 生産者による流通展開の事例研究

## 西湘大型定置網の現状と課題

大野 知多夫・木幡 孜

Case study on the Marketing of Fishery products by the Fishermen

- The Present situation and Subject of Large set net Fisheries  
in the Seishou region of Sagami Bay

Chitao OHNO\*・Tutomu KOBATA\*\*

### はしがき

相模湾の大型定置網は、本海域に適應する漁法として、200年に及ぶ歴史の中で淘汰されてきたものである（平元1980）。とりわけ西湘・湘南地先の大型定置網は、農林水産統計による同海域内の漁業総生産量の9割を賄う代表漁業である。本漁業はまた、特定の資源というより接岸資源全体を漁獲対象としているため、1935年前後に起こった海況の大変動の折りに、経営を唯一かろうじて維持し得た漁法であると言われており、他の業種にはない優れた生産特性が実証されている。然るに近年、大型定置網も例外ではなく、経営状態は深刻の度を増すばかりであり、現在その危機的状況はまさにその極に達しようとしている。

これまでの研究で、現代の経営不振の主要因は、生産技術にはなく、市場流通における多獲性魚の実質価格が1960年代後半以降の僅か10年足らずの間に数十分の一に大暴落したなど、流通条件の急変にあることが明らかにされている（木幡1979a, b）。つまり、魚種組成の8割強を占める多獲性魚を適正な価格（食用仕向の最低価格）で買い上げられることが定置網経営成立の大前提になっていた。然るに、これまで100%依存してきた既存流通があり余る物流の中で大きく変質し、いわゆる低廉な多獲性魚ばなれを進行させたのである。このため生産

者はもとより消費者も見えにくい形でダメージを受けている。従って、打開策の主眼は、消費者の真のニーズの喚起とこれに応える自前の流通経路を開拓しつつ、確かな規模まで拡大していくことである。即ち、倉田(1981)の主張“売る漁業の展開”にあり、高鮮度の多獲性魚を日常食価格で提供するシステムを構築することである。

本報では、神奈川水試相模湾支所が行動を起こし、1987年以降実証段階に入った西湘大型定置網における組織間直販・活魚出荷・漁協朝市等の現状と課題について報告する。

### 方 法

先の研究成果を踏まえ、1984年度から生産者に対する積極的な問題提起が神奈川水試相模湾支所と同水試第2普及班の職員全体制で開始された。しかし、実証的研究段階に入ったのは3年後の1987年度からである。1989年度においても、なお試行段階を脱していないが、二宮町地先の五ツ浦定置を生産側の主なターゲットに選び、生協等との直販・活魚の活用・朝市の展開など、各種の試みを呼びかけ、上記職員が支援する中で高付加価値化の実際的手法を模索している。

ただし、その際、以下を留意点として行動することに努めた。

### 脚注

1990.8.2受理 神水試業績 90 - 166

\* 相模湾支所

\*\* 漁業研究部

表1 五ツ浦定置関連の生産者が実施した流通展開

年 度	( 組 織 間 直 販 ) 魚種 出荷量×(単価-市場単価)=効果	( 活 質 出 荷 ) 魚種 出荷量×(単価-市場単価)=効果	( 朝 市 ) 魚種 出荷量×(単価-市場単価)=効果	出荷量 及び効果の 合計
1 9 8 7 年 度	マイワシ 1,589kg × (236 - 39円) = 313,033円 マアジ 1,450 × (462 - 219) = 352,350 ウマツラハギ 650 × ( 82 - 38 ) = 28,600 サバ 230 × (265 - 80 ) = 53,650 その他 926 × (246 - 150) = 88,896 計 4,905kg 836,529円 (売上額 1,402,850円 市場価格566,321円)	マアジ 21,000kg × (327 - 50円) = 5,817,000円 計21,000kg 5,817,000円 (売上額 6,867,000円 市場価格1,050,000円)		出荷量 25,905kg 売上額 8,269,850円 市場価格 1,616,321円 ----- 効果 6,653,529円
1 9 8 8 年 度	マイワシ 2,955kg × (247 - 30円) = 649,915円 サバ 1,674 × (274 - 90 ) = 308,016 ウマツラハギ 822 × (201 - 40 ) = 132,342 カマス 265 × (1,160 - 850) = 32,150 その他 856 × (666 - 450) = 184,896 計 6,612kg 1,357,319円 (売上額 2,241,159円 市場価格883,840円)			出荷量 6,612kg 売上額 2,241,159円 市場価格 883,840円 ----- 効果 1,357,319円
1 9 8 9 年 度	マイワシL 3,618kg × (272 - 31円) = 871,938円 マアジS 1,921 × (834 - 439) = 758,795 イサキS 632 × (356 - 80) = 174,432 カタクチイワシ 351 × (237 - 72) = 57,915 ウマツラハギM 541 × (90 - 20) = 37,870 その他 249 × (450 - 376) = 184,266 計 7,312kg 1,861,461円 (売上額 3,162,632円 市場価格1,301,171円)	ウマツラハギ31,180kg × (43 - 13円) = 935,400円 マアジS 39,500 × (364 - 121) = 9,598,500 イサキS 7,000 × (180 - 20) = 1,120,000 計 77,680kg 11,653,900円 (売上額16,978,740円 市場価格5,324,840円)	マイワシ 1,237kg アカカマスM 116kg カタクチイワシ 320 タチウオ 64 ウマツラハギ 728 サバ 37 イサキS 430 マダイ 96 マアジS 245 マアジM 37 その他 91 計 3,361kg 844,682円 (売上額 1,529,140円 市場価格684,458円)	出荷量 88,353kg 売上額 21,670,512円 市場価格 7,310,469円 ----- 効果 14,360,043円

注) 活質出荷は共栄定置分を含む、年度は、4～3月、組織間は主として1農家グループ・4生協の5グループとの交流、活質は、関西四国方面の養殖種苗用(主として八造丸仲介、三崎漁港帰途の活魚運搬船利用)、朝市は、第2第4土曜日の開設の18回分。

(1) 戦略的には、次の二つの方向を意識した展開を支援すること。

\* 対象を消費者組織に置き、組織間流通の可能性と限界を探る。

\* 年に数回起こる100 t規模の大漁日の漁獲物の高付加価値化が狙いであり、この試行錯誤が大型活質の導入気運を高める活動につながることを意識した支援に努める。

(2) 戦術・戦技など実戦的手法はきわめて未熟な段階にあるが、いま定置網が直面している状況に猶予はなく前向きな試行に取り組む中で、経験しつつ手法を体得していく方法をとること。

(3) 目標実現に不可欠な主体作り、即ち“やる気のある当事者の存在”がなお不明確であるが、これまでの試行の中で、体験に基づく意識の醸成を待つことが現実的であると判断され、緊急的な状況下に在るとはいえ、意識の押売は厳に慎むよう特に注意を要すること。

### 結果と考察

1987年度以降の主な実績を組織間直販・活質利用・朝市に分けて、表1に示す。これらによる年度別のトータルの出荷量と効果は、1987年度が25.9t、6,650千円、

1988年度が6.6t、1,360千円、そして1989年度が88.4t、14,360千円となっている。このように実績が示す数値は、3ヶ年を見る限り僅かな規模であるが、内容的には拡大しており、主体たる生産者側の活動意欲も向上し始めている。

以下に、手法別の現状と課題を述べる。

### 1 組織間直販

#### (1) 現状

地域の農家婦人グループ(以下オレンジ会と言う)の呼掛けが動機として始まった試みであり、1989年度現在オレンジ会と4生協との交流が行われている。方法としては、魚を予約日に現場に買いにきて貰うと言う最も簡便な方法をとるグループがオレンジ会と1生協、宅配便で各集団の配送センターに所定量を発送するやり方をとるグループが3生協である。このように、生産側の現状は、買い手側のアクションに対応する動きに留まっているので、手法の表題を取って組織間直販とした。

1987年度以降の経過を見ると、魚種は当年の漁況の変化を反映して一定していない。従って、年々の動向は金額よりも扱い量でみるべきだろう。3年間の動向を比較すると、1987年度が4.9t、1988年度が6.6t、そして1989

表2 年度別グループ別直販実績

グループ名	オレンジ会		A生協		B生協		C生協		D生協	
組織世帯数	30		1,300		3,000		5,200		1,700	
対象世帯数	13		100 150		100 65		100 70		100 80	
単位購入量	5~6kg		1.5kg内外		1kg		1kg		1kg	
1987年度	1,335kg		1,035kg		375kg		1,517kg		643kg	
1988年度	1,103	83%	1,774	171%	1,008	269%	1,353	89%	1,374	214%
1989年度	890	81	1,737	98	1,283	127	1,286	95	2,116	154

注) %は前年比を示す。

B, D生協; 89年度の伸びは約15~20世帯の3kgパック購入グループの出現によるという。

オレンジ会, A生協; 89年度の停滞は予約日の不漁のための取引減による。

表3 小田原市農協下中支部 オレンジ会の特徴 1989.8.8 会員 9名の聴取り

区分	説明
a	下中支部農協婦人部に所属する主婦達であるが、同婦人部の下部組織ではなく、独立した同好会的集団で、オレンジ会と称する。
b	すなわち、十数年前の若妻会のクラスメート20人の等質集団であり、内13人が鮮魚購入グループを組織し、1班6~7人の2班で行動している。
c	班員間の距離、6~7人/班が無理のない規模になっている。
d	都市または農家から嫁いだ人々である。ただし、半数以上は都市出身者、また、農家出身者を含め、大半は、農業無経験であった農家の主婦達。
e	家族構成は、老人を含む6~7人である。
f	大半が専業農家の主婦であり、極めて忙しい人々である。
g	生活レベルは、都市生活者より高い。
h	学歴も高く、都市生活者と変わらない。
i	直販活動開始までに2年を要している。この間、水産業改良普及員と農家の生活改良普及員を通じて、現物による体験的な知識をものにしていく。
j	いま彼女達は、「直販活動が生活の一部として定着したとの実感を持つ」と言っている。例えば5~6kgの魚を当日の生食用からはじまり、後日の冷凍フライ種等まで、高鮮度時の内に1時間足らずで処理し、単一魚種でも10日間位は楽しむと言う。さらに、活動以降子供達が魚好きになったこと、及び馴染みの魚屋の鮮度が気になるようになってしまったことを、一様に強調している。
k	ちなみに、当日の普及員によれば、接触当初の彼女達は魚に関するごく普通の集団であったと言う。

年度が7.3tに達しており、総数では年々着実に伸びている。これをグループ別の内訳で示すと表2になる。

これによると、グループ間の特徴は、対象世帯の数の変動と単位購入量(1回世帯当り購入量)で認められる。対象世帯数は、オレンジ会とA生協が不変或は増になっているのに対し、B, C, Dの3生協は減になっている。また、単位購入量も前二者に対して、後三者で1kgと僅かである。即ちこれらの特徴から、5グループは二つに分けられる。

両者に見られる共通項は、品物の輸送経費に認められる。オレンジ会とA生協は、代表者が現地に赴き、5~40kg単位で自ら輸送に当たるなど、経費を最小限に抑えている。これに対し、他の3生協は、共同購入という工

夫があるものの、3kgパックを単位とした荷作りと宅配便の手配までの工程を生産者側に依頼しており、各家庭の着値(手間100円+箱代150円+氷代50円/3kg+運賃)は産地の約2倍に達している。つまり後者の3生協では、安さと高鮮度という目玉が活かされていない。

また、5グループ間の差で特に注目される点は、単位購入量の差である。即ち、単位購入量と同一期間内の総量が世帯当りを見た時、オレンジ会で際立って大きい。そこでオレンジ会の特徴を改めて調査し、表3の結果を得た。

これらに対して、生協側が異なる点は、表3の区分b, c, e, i, j, kである。

bとcは組織のまとまりとして有利な条件と考えられ、オレンジ会的なグループの複数化を進める上で有用な情報である、

eの家族構成は、生協側の情報によると老人が少ないことと4人弱であるが、購入量の大きな差をもたらす程のものではない。

iの事前のPRについては、既に問題意識を自覚した人々の集団でもあったことから、代表者に対する資料による口頭説明のみで出発している。しかし、3ヶ年経過した時点で生協側からくる応答内容は、「鮮度は抜群であるが、1kgの魚では処理しきれない」、月1、2回にかかわらず「イワシばかりが続くのは不満である」と言う感想が多数を占めており、一般消費者と変わらない。このことは、知識のみの限界を示唆するものである。一方、オレンジ会の事例は体験と時間が有効なPRであることを教えている。

jの生活実感については、生協側では全く非日常的な段階であり、オレンジ会との間に大きな開きがある。

kについては、生協側の現レベルはオレンジ会の当初の段階に等しいものと考えられるので、オレンジ会方式等のアタックで、生協側がどの様に变化し得るかの試みは、今後の意義深い実験になるだろう。

## (2) 課題

出荷量の規模拡大のポイントは、取引相手の拡大ではなく、現4生協の世帯当りの購入量の増大と参加世帯数が増加にある。このため、オレンジ会方式のPR活動を四季を通じて強力に展開する必要がある。

各生協は、3～4千世帯の小規模組織であるが、鮮魚購入班への加入率はその中の数%にすぎない。即ち、潜在的な購買力は相当なものと予想され、相模湾定置漁業が組織間流通を目指す対象として、むしろ最適規模の集団と考えられる。

## 2 活簀出荷

### (1) 現状

活簀による相当規模の活魚出荷は、表1に示したように1987年度と1988年度に行われている。これら両年度の蓄養は、活魚出荷を狙った当地方の初めての試みであり、従来の出荷調整を目的とした蓄養分を除いてある。

1987年度は、マアジを好漁した年であり、養殖県の種苗用として溜込み、約1.5ヶ月の蓄養で600万円弱の効果を上げた。

1988年度は、目ぼしい魚種の好漁がなく、活簀の利用がなかった。

1989年度は、これに対して、魚種ではなく、活簀の活用を意識した展開が行われており、これまでとは質を異にしている。即ち、年度当初の漁況は、1988年度と同様にあまり思わしくなかったが、こうした状況下でのウマヅラハギによる100万円弱の効果は、生産側が独自に見つけたルートで得たものであり、意義は大きい。続くマアジによる960万円は、9月以降の小アジの好漁と暴落に対処するため、同じ手法で獲得した効果である。

表1に示す活簀出荷の特徴は、利鞘は薄いが大量処理が可能であり当面の主力手段になる、と考えられる点にある。

### (2) 課題

活簀利用の最大の効果は、漁期間の中で数%の確率で起こる多獲性魚の大漁日のを収容することで発揮され、少なくとも100t規模の大型活簀を導入する必要がある。しかし、一定置網当り数千万円の設備投資が見込まれるため、そのきっかけとなるような環境作りが必要である。

いずれにしても、1989年度に見られた意識変化は、活簀出荷の最終目標につながる一つの道程として有効であり、生産者に対し継続して支援の強化が必要である。

## 3 朝市

### (1) 現状

この朝市は、五ツ浦定置と係わりのある二宮町漁協地区で始められたものであるが、他地区の朝市と若干趣を異にしている。即ち、1988年度の神奈川県農政部の重点事業、“海浜の資源高度利用計画策定事業”の呼掛けが契機となつてはいるが、独自性が強く感じられるものである。当地区では、呼掛けに先掛けて漁協の役員会が持たれており、漁協地区の活性化が話題になった。案は幾つか出されたが、地域全体の結束に不安がある。とりわけ、皆が強く意識したのは、“この様な気持ちで全員がまとまったのは初めてだ。恐らく初めて最後だろう。唯一のチャンスであり、やるからには絶対に成功するものを第一番目を選び、次の地域全体への弾みにする必要がある。”であったという。

そこで、最も簡便で確実性の高い試みとして選ばれたのが、この朝市であった。モットーは、“地場の朝獲れの魚を地域の人々に味わって貰う”ことに置かれている。開始後、順調な滑り出しを見せており、これをテコとした新たな展開を見守りたい。

第2・第4土曜日を開催日と定め、1989年5月27日にスタートして1年を経過したが、品数と数量の見込み違

いがなお頻発している。しかし、固定客も出来つつあり、定着の可能性は、充分期待できるだろう。

朝市来場者の範囲は、地元二宮町が30～40%台と意外に少なく、横浜・川崎を含む周辺11市4町に互っている。当事者達の一様に示す驚きは、この解りにくい小さな市に、これほどの人々が集まることに集中している。集客数は、初回の数百人を最高に1989年度末で百数十人に落ち着いてきている。

利益は、毎回数万円程度であるが、これを積極的に伸ばそうとする動きにまでには至っていない。

販売価格の特徴は、高い魚で損をし、安い魚でカバーするというサービス精神が発揮されている。

## (2) 課題

目的が他にあるとは言え、商いの基本を会得するよい機会であり、集客と売上規模の拡大に必要な努力は、試行すべきであろう。但し、好ましい点は、自らの意思で始めたと言う自覚が強く感じられることであり、第三者

が差し出た行為は極力慎むべきである。

いづれにしても、当事者の意識として、年間を通して開設を維持することを当面の目標としているので、今後ともその過程を分析的に克明に追跡することとしたい。

## 文 献

平元泰輔（1980）：定置網漁具の変遷，相模湾定置網漁海況調査表，発刊25周年記念号，12 - 17.

木幡 孜（1979a）：定置網からみた相模湾の生産性に関する考察 - の1，生物生産の特徴と相模湾の位置付け，相模湾資源環境調査報告書 - ，261 - 270.

木幡 孜（1979b）：定置網からみた相模湾の生産性に関する考察 - の1，経済的生産性の現状と問題点，相模湾資源環境調査報告書 - ，93 - 103.

倉田 享（1981）：'80年代の漁業振興，水産海洋研究会報，38，89 - 93.